

1

(1・2 I・2 II・6 I・6 II 各完答 7 順不同 8 完答・順不同)

1 I ア
II ウ
III ウ
2 I 鳥
I 岬
II 海
II 端

3 C
4 孝
5 エ
6 I 一
I い
II 先
I す

7 人間は
I 災害時
8 イ・エ・カ

9 a 遠望
b 勇氣
c 板戸

2

(4・6 I・6 II 各完答)

1 a 失礼
b 根深い
c 同行

d 路上

2 道の端
3 イジメ

4 A エ
B ア
C オ
D イ
5 イ

6 I 生
I 帯
II 日
I る
7 ア

8 イ
9 (記述題)
10 かわいそう

2

9 三人の友達のカバンをそれぞれの家まで運び、八十円ずつもらおうという契約。

(同意可)

配点	
19	21 各2点×7=14点
29	6点
その他	各4点×20=80点
100点	

①

- 1 見慣れない言葉であっても文脈から意味を推測したい。Ⅰは「武士たち」が「お歴々」の前で語るといふ場面をイメージしたい。Ⅱはどのようにして津波から生き残ったのかを知りたがっており、その証言は「詳細に」書きとめられていた。Ⅲは「地面が上下して、波のように、うねっている」という「信じられない光景」を目の当たりにしているときの様子を暗示する言葉である。
- 2 「砂嘴」は馴染みのない言葉だったが、沿岸流によって運ばれた砂が静水域に堆積してできる自然現象である。「砂嘴」の「嘴」は「くちばし」とも読むことができ、沿岸流によって運ばれた砂が静水域に堆積してできる自然現象である。
- 3 接続詞は後続の話題にどのようなつながりがあっていくかを示す目印であり、読み進めるための大きな手助けとなる。特に段落冒頭の接続詞は普段から注意を払って読み進めてほしい。(C) 以外は逆接の働きの接続詞が入り、(C) には「だから」などの順接の接続詞が入る。間違えた場合は適当な接続詞をあてはめて再読し、前後のつながりを確認してほしい。
- 4 江戸時代に重視されていた考え方を示す言葉であり、ここより後の部分でくり返し述べられていたことに気づきたい。闇雲に探さず、まずは同段落の「必死で：祖母の安否を：」に注目し、答えのイメージを作り上げてから探そう。なお、「親」「母」はその後の話題と照らし合わせてもこの部分で述べるにふさわしいとは言えない。
- 5 ことわざは単に意味を暗記するだけでなく、その言葉にぴったりの状況や、使いどころもあわせて身につけてほしい。知らなかったものはこの機会に興味調べしておくこと。
- 6 Ⅰは「ここより前」という指定に注目しなければ必要な時間を取られてしまう。――線④より手前で時間を無駄にしていたことの説明をたどれば良いだろう。Ⅱは武士にとって命と同価値とも言える「刀」を大切に、子孫に受け継ぐことを何よりも大切にすることが「まともや」時間を無駄にすることにつながってしまったのである。
- 7 「教訓」とは今後の糧として生かせる経験を示したものを指す言葉である。――線⑤以降も基本的に「宝永大地震」による「巨大津波」という大災害の記録である「柏井氏難行録」の具体的な内容が書かれているので、その中から現代人である読者に対し、ここから学ぶべきことは何なのかをまとめられた部分を探そう。
- 8 「ここで、この父は現代社会では考えられない挙にでた」「老母を助けにいった」「江戸時代、孝はそれほど重かった」が手がかりとなる。答えに抜けがないように、各へ 内に分の想定をあてはめてイメージを作り、慎重に答えたい。
- 9 a 「遠望」は「遠」のしんによる部分や七〜十画目を正確に書こう。b 「勇氣」は「勇」の字形に注意。c 「板戸」は書くこと自体は簡単だが、文脈に沿って答えを引き出せるかどうか。

②

- 1 それぞれ文脈に沿った漢字を適切に答えよう。a 「失礼」は「礼」を「札」としないように。b 「根深い」とは物事の由来するところが深く、容易には取り除けないところにあることを指す言葉である。c 「同行」は「動向」などの同音異義語と混同しないように。d 「路上」は「路」のあしへの形に注意してほしい。
- 2 前半は井上家における「わたし」と亜香音の母親とのやりとりとその続きであり、後半は「わたし」と亜香音とのやりとりの場面である。
- 3 本文を読み進めていくと、この文章よりも前の部分で、亜香音がイジメを受けているとおぼしき現場に「わたし」が居合わせ、その後「わたし」と亜香音とのやりとりの中で「イジメはなかった」と亜香音本人から告げられていたことがわかる。「わたし」は「イジメ」について確認するため、亜香音の母親に会いに行ったのである。「学校に問い合わせたり：」もヒントになるだろう。
- 4 (A) には「感情の起伏が乏しく、なにごとも泰然と受け止める性格」のようにみえる様子を表す「ゆるゆると」が入る。(B) には料理をしていないであろう井上家のキッチンの様子を表す「すっきりと」が入る。(C) には「わたし」の言葉に反応した亜香音が歩みを止めた様子を表す「びたりと」が入る。(D) には「わたし」に真実を明かすことを亜香音が決意し、歩きはじめの様子を表す「すたすたと」が入る。
- 5 「ふさわしくないもの」を選ぶことに注意しよう。「夕食の美味しそうな匂い」は――線②より後の部分であるし、井上家のキッチンでは料理をしている様子が感じられなかった、とも書かれていた。
- 6 Ⅰは亜香音の生活についてふれた表現を探せば良いが、「見えない貧困」をここにあてはめると文のつながりがおかしくなるので注意しよう。Ⅱでは台所から匂いがしないことから井上家には料理の習慣がないことに「わたし」が気づき、そこからさらに亜香音の食生活に思い至っていることを読み取り、「：とは考えられない」につながるものとして適切な表現をたどれば良い。
- 7 「苦笑」と「ため息」のそれぞれに対応した心情を読み取る。井上家で抱いた違和感から、亜香音が本当にイジメを受けていたわけではないことに気づき苦笑したのである。さらにそこから亜香音を取り巻く生活の中の大きな問題に気づいたことが「ため息」につながっている。
- 8 亜香音の「わたし」に対する心情はやや読み取りにくいだが、少なくとも好意的である様子は描かれていないためAは不適。亜香音の母親と「わたし」が話をしていたことはここより後で亜香音が気づくことのためウも答えから外せる。エの「動揺」は明らかに不適である。
- 9 亜香音と「三人の友達」との契約の内容を説明する。カバンをそれぞれの家に運ぶことで報酬を得るという交換条件であった。「べつに友達やない」と言っているが、ここでは「友達」と書いても良いだろう。
- 10 設問の指定に注意。「わたし」と亜香音の母親とのやりとりの部分から探すという方針をつかめていればスピーディーに答えにたどりつけるだろう。周囲に同情されまいと暮らす母親だからこそ、「わたし」の不用意な一言に強く反応したのである。